博士学位論文　要旨

ロシア･シオニズムの想像力 1881–1917

――帝国における非ユダヤ人の影と社会という位相

鶴見 太郎

本論文は、ロシア帝国において、ロシア語を中心に活動していたシオニズム運動の思想的側面、とりわけその世界観を、その機関紙『エヴレイスカヤ･ジズニ』や『ラスヴェト』などを中心とした出版物に即して社会学的に分析したものである。この潮流のシオニズムは、反主流派の筆頭である、シオニズム右派として知られる修正主義シオニズムに主に連なっていく流れである。

ロシア･シオニズムの思想的特質を体系的に抽出するというそれ自体新規性を持つ作業を通して本論文が従来主に「ディアスポラの否定」として見られてきた（ロシア･）シオニズム像に変更を迫るのは、シオニズムとロシア帝国というディアスポラの地との密接な関係性に関する観点である。具体的には主に次の 2 点である。第 1 に、ロシア･シオニズムがロシア帝国という場を重視し、かつそれと有意に連関していたこと、特に、この点を差し置いて少なくとも 1917 年までのロシア･シオニズムの思想的射程を理解することはできないということ。第 2 に、それまで反ユダヤ主義への反応や伝統的なユダヤ人意識の延長として捉えられることがほとんどだったシオニズムにおける、ロシア帝国という場が及ぼした影響、とりわけシオニストによるユダヤ人定義やシオニズムが目指したものに関する影響。

本論文では、これを分析するに際して、「客観的文脈」と「主観的文脈」という観点を重視する。従来の研究では、研究者の側で設定した客観的文脈とシオニズムを関連付ける作業は行われてきたが、シオニスト自身がいかなる文脈を想起していたのかという側面は不問に付されてきた。

第 1 章では、19 世紀後半のロシア帝国とユダヤ人の関係史と、初期のシオニズム思想を分析した。19 世紀半ば以降、シオニストの多くを輩出したユダヤ人の層であるマスキリーム（啓蒙主義者）は、ロシア帝国の中で、ユダヤ人の集合性を保持したままどのようにユダヤ人の地位を向上させていくかに奮闘していた。この姿勢を可能にした客観的文脈としては、ロシア帝国の、集合的な単位が実質的には帝国の構成単位となっていた政治社会的条件が挙げられるが、ユダヤ人の側でもそうした多様性を担保する存在としてロシア帝国という場が想起されていた。1881–2 年ポグロムはそれまでのそうした姿勢に再考を迫る事件だったが、シオニストになったユダヤ人は単にユダヤ人迫害からの逃避としてパレスチナ移住を構想していたわけではなく、むしろ多民族的環境という文脈を継続的に想起しつつ、シオニズムを通してユダヤ人のネーションとしての存在を内外に提示することで、ロシア帝国における安定した政治社会的地位を確保しようとしたのである。

1905 年革命前後の時期を中心に扱う第 2 章ではこの点について掘り下げていった。中心的に取り上げたのは、月刊『エヴレイスカヤ・ジズニ』や週刊『ラスヴェト』といった、ロシア・シオニズムの機関紙である。とりわけ、シオニストの世界観の中での「ネーション」という概念の位置づけを集団内アイデンティティと集団間アイデンティティという観点を手掛かりに探っていった。ここで、ユダヤ人の集団内アイデンティティとは、ユダヤ人自身にとってのユダヤ人のアイデンティティのことであり、集団間アイデンティティとは、ユダヤ人がどの集団群（諸宗教集団、諸ネーション、諸階級等）に属すのかということをめぐるアイデンティティのことである。ロシア帝国において、シオニストはユダヤ人が諸ネーションという集団群に数え上げられることは次の 3 点の効果があると考えた。第 1 に、前章でも見たように、ユダヤ人が尊厳を持った集団であるとみなされること、第 2 に、他と区別される固有の利益を持った政治的統一体であることを示すこと、第 3 に、多民族的環境において、中立性を確保するということである。この点は、例えばポーランド化やロシア化が、それぞれロシア人とポーランド人にユダヤ人に対する不信感を印象付けるという事態を、ユダヤ人という別個の存在としてとどまることで回避するという効果、また、いわゆるユダヤ人陰謀論に対して、ユダヤ人がユダヤ人の民族的利益以上のことは目指していないことを印象付けるという効果があると考えられた。このように「ネーション」概念は集団間アイデンティティという局面において重要性を持っていた。しかし興味深いのは、その反面で、集団内アイデンティティという局面とこの点が分離していたということである。シオニストは、ユダヤ人がネーションであると主張し、その証左としてシオニズムを推進していた一方で、ユダヤ人の定義はむしろ明白に留保していたのである。これは、『ラスヴェト』においてユダヤ人の本質に関して議論した記事がきわめて少ないことにも

表れている。

第3章では、では、なぜロシア・シオニズムにおいてユダヤの本質について語られることが少ないばかりか、それを戒める発言さえ見られたのかという問いを探ることを通して、シオニズムの主観的文脈におけるロシア帝国を中心としたディアスポラの地における非ユダヤ人の影響を見出した。まず、ユダヤ的な本質がロシア系において強調された局面であり、ロシア系がユダヤ的なものを強調していたと印象付けた事件である「ウガンダ」論争を取り上げ、実際はロシア系は戦略的に「ユダヤ的なもの」を前面に出していた側面が強かったことを指摘した。しかし、では彼らは何を目指していたのか。これを見定めるために、まず、ロシア・シオニズムの指導者の一人パスマニクが1905年に『エヴレイスカヤ・ジズニ』に連載した自伝小説を読み解いた。そこでは、同化でもなく、伝統回帰でもない方向が強く意識されていることが明らかとなった。この方向が打ち出された背景として次の2点が指摘できる。第 1 に、資本主義化によってユダヤ人固有の経済的機能が失われ、ユダヤ人の同化が懸念されるようになっていた中で、実証主義や唯物論的な想像力がロシア・シオニストにおいて現実を捉える上で重視され、それが、シオニズムが形而上学的な観念論に堕ちることを警戒させた。第 2 に、ユダヤ人に固有の契機として挙げられるのが、反ユダヤ主義という経験である。シオニストが特に嫌悪したのは、反ユダヤ的な周囲に存在を認められるために、周囲におもねる形でユダヤ人を定義してきた歴史だった。彼らから見て、同化主義的であるほどユダヤ人の本質について語りたがり、シオニストほどそうした固定化を嫌ったのだった。同時に、社会主義はもちろんのこと、ロシア自由主義やナショナリズムは、排他主義というよりも拡張主義的であり、とりわけユダヤ人に対しては同化を求めていた。彼らの論理は、ユダヤ人という集合性や文化に価値がないということだった。これに対してシオニストが提示したのが権利という概念である。すなわち、諸民族には、その文化や価値に拘わらず権利が付与されるべきだという主張である。文化や価値を前面に出す戦略はそれと矛盾するものだった。また、実証主義的な視線が発見したのは、ユダヤ人を取り巻く諸事象や諸形態が社会的に構築されてきたものなのであって、ユダヤ人に本来的に備わっている性質ではないということだった。とりわけそれはディアスポラという社会的条件に起因するように思われた。シオニストにとって、それまでの「ユダヤ人」概念は、不本意な形で様々な負荷を背負ってきたのだった。それに反発する形で、シオニストは本論文が「純粋な社会性」と呼ぶ何も色づけられていない無垢なものを追求していったのであり、ユダヤ人が基軸となった社会を創るという発想が生まれた。パレスチナはユダヤ人が主体的な創造活動を行っていた時期と考えられ、そこを目指すということは、そうしたいわば様々な手垢にまみれてきた「ユダヤ人」概念をリセットし、自律的にそれを育んでいくという意味合いを持っていた。したがって、第一義的には彼らは「ユダヤ人国家」ではなく「ユダヤ社会」の建設を目指したのであった。

第4章では、こうした経緯でロシア・シオニストがどのような「国際規範」をつくっていったのか、どのような想像力の中でパレスチナの現実とシオニズムの整合性を付けようと

していたのかを検証していった。まずシオニズムのライバルだったユダヤ人社会主義組織ブンドだけでなく、ロシア・シオニスト自身が参照していたオーストリア・マルクス主義の民族理論を概観したのち、シオニストがこれをどのように読解し、ブンドを批判していたのかを明らかにした。かなりの部分においてオーストリア民族理論を下敷きにしていたシオニストがブンドを批判したのは、前章で見たように、文化は社会的基盤があって初めて生まれ維持されるし、そうすべきであるとの視座をシオニストが持っていたからであり、それゆえに、単なる文化的自治は民族存立には意味を成さないと考えたからだった。したがって、ロシア・シオニストが描いていたのは国家的単位と民族的単位が必ずしも一致しない多民族的な秩序だったが、どの民族も本拠地としての領土を持つ空間だった。ロシア・シオニストがパレスチナに投影したのもこの秩序観だったのである。広大なアラブ地域とその一区画のパレスチナという位置づけで、パレスチナはユダヤ人の民族的本拠地とされたが、アラブ人はマイノリティとしての権利が付与されることが想定された。

結論においては、1917 年革命期におけるシオニズムの状況を示したのち、本論文のまとめに加えて、その含意として、パレスチナでの展開を西欧国民国家史ではなく、ソ連民族政策史とのアナロジーで見ることの有効性および、1 世紀前の時代において狭義での「社会」という位相が想像力の中で重要性を持っていたことに注視すべきであることを示唆した、